

# チェコと日本の音楽

## 出井則太郎

声楽家

「なぜヨーロッパの音楽をわざわざ学びに来たの？ あなたの国には本当に素晴らしい音楽があるのに」この言葉は、チェコ留学中の私を一番戸惑わせた。彼らから聞かされる日本の魅力、日本の音楽の素晴らしさ。一方、日本人でありながら日本の音楽についてその魅力をうまく語れない自分。今回は、今、チェコで人気の日本の音楽についてリアルにお伝えしたい。

く微笑んでしまう。

しかし最近はかなり変わってきた。若者の口から発せられるのは「NARUTO」「名探偵コナン」「花より男子」etc……日本のアニメ、漫画、そしてテレビドラマである。そして言葉は続く、

「ガゼット」「ミヤビ」「ディル アングレイ」「ガクト」「ベルサイユ」……。

ご存知だろうか？ チェコを含めヨーロッパで絶大な人気を誇る日本人ミュージシャン、日本のロックグループである。ここには誤解や勘違いは存在しない。むしろ、日本人である私たちより詳細な情報と知識を持っている。そして、以前は会話の端々に垣間見えたアジアへの嘲笑はなく、圧倒的な陶醉のみがそこにある。

「フジヤマー」「スシ〜」「ゲイシャ」「ハラキリ」……以前、海外で日本人であることを明かすと、真つ先に言われた日本語である。ほとんどの場合、遠い東洋の国と、その神秘の国への興味には若干の誤解が入り混じっていた。それでも日本語を海外で聞くとなんだか嬉しい。妙なニホンゴにも愛想よ

ちなみに前述のロックグループ

the Gazette, 雅-MIY AVI-, Dir en grey, Versailles, Gacktは、いわゆるビジュアル系で、そのまま「ビジュアルケイ」と呼ばれている。チェコにはDir en greyが一度来たが、その時は大変な騒ぎになった。他のバンドも、公演があればドイツやフランスまでライヴのために出かける。もちろん、そこにはヨーロッパ中からファンが押し寄せるのだ。

先日はX JAPANのギターリストだったhide(ヒデ、一九六四年十二月十三日—一九九八年五月二日)の十三回忌ということでファンたちがそれぞれに集会を開いた。彼らの夢は、日本に行くこと。日本でライヴを聴くことなのだ。私たちがヨーロッパで本場の音楽に触れたいと願うように、また彼らもマンガやコスプレ、ビジュアル系の本場、日本を夢見ている。

また私の友人のチェコ人には、流行りのロックとは一線を画して坂本九の大ファンがいる。彼とは昨年、日航機墜落事故の慰霊碑まで一緒に行くことになってしまったのだが、嬉しそうに日本中の坂本九にまつわる場所を巡っていた。また、チェコの居酒屋で演歌

ファンのチェコ人から「天城越え」を歌ってほしいと頼まれたり、チェコビールを飲みながら美空ひばりの歌について語り合ったりすることもあった。ジャズではピアノストの上原ひろみが人気だ。残念なことに、そこにクラシック音楽界の日本人の名前が出てこないのが現実である。

チェコに住む前の話だが、お隣の国、オーストリアのウィーンに住んでいた時期に私は週二回、座禅の会に参加していた。そこには画家、彫刻家、作家、舞台人、ウィーンの文化人がたくさん来ていた。ドイツ語で座禅や禅思想の説明を聞き、日本人の禅の大家が語った言葉をドイツ語で聞いていた。ウィーン市民に混ざってポツンと一人、日本人の私がいる光景が彼らには素晴らしく魅力的な空間に感じたらしく、そこでたくさん友人ができた。

私がそこに通い出したきっかけは、西洋音楽を敬愛し、西洋音楽を学び、西洋音楽を演奏して生きていく自分がヨーロッパで生きていくには「日本人である事」を忘れてはいけないと感じたからだっ

た。イタリア・ドイツ・フランスとヨーロッパ音楽の本場で学び、衝撃を受けるたびに声楽家として自分の楽器である身体にコンプレックスを覚え、越えられない骨格や体格の壁、舞台での見た目や空気に違和感を覚えた。

また日本語に慣れた耳や感覚が音楽的な成長を妨げることもあり、アジア人としても韓国や中国の優秀な演奏家のエネルギに押されてしまう。日増しに募る劣等感が私に重く押し掛かっていた。

そんな生活の中、あるとき「日本人」としての自分をアピールすることでも状況が一変した。同じ街に住んでいながら出会えなかった、地元の人との交流が一気に増えたのである。彼らは、日本が大好きだった。私たち日本人の音楽家がヨーロッパに憧れる以上に、彼らは日本に憧れていた。

私はウィーンで日本について学び始め、伝え始めた。それは留学生としてではなく、また外国人としてではなく、仲間として彼らの生活に必要とされるために私が選んだ役目でもあった。しかし、そこはウィーン。音楽の都。モーツァルト、ベートーヴェン、ブラー

ムス……。さすがに音楽という視点で、日本人のアイデンティティを再認識するには至らなかった。

その後、チェコに住み、声楽の先生を探しているときにその言葉は私を襲った。

「なぜヨーロッパの音楽をわざわざ学びに来たの？ どうして西洋音楽を演奏するの？ あなたの国にはあんなに素晴らしい音楽があるのに、なぜ日本の音楽を演奏しないの？」

恐らく衝撃を与えるつもりも悪意もなく、ただ素直に素朴な疑問を投げかけただけなのだ。そしてまた、これはウィーンではなくチェコだったからこそ発せられた言葉なのだが、当時の私は戸惑った。

「日本の音楽」それは私が「日本的な響き」として習い演奏した、明治以降に西洋の音階で表したものではなく、つまり、それ以前の伝統音楽のことだ。習わずとも生活の端々に残り、自分の「音楽的成長」を妨げた、その音楽文化である。そしてチェコ人の口から語られる雅楽の魅力。能の神秘。尺八の響きとその表現への陶醉。日本の音、日本人の感性に対する賛

美とヨーロッパ人が持ちえない感性への憧れ。私は、ただただ、その言葉の渦の中で立ち尽くした。

その圧倒的な日本音楽への憧れと尊敬と賛美を前に、私が求めるヨーロッパ音楽への理想の希求は影を薄くしてしまったのである。

しかし日本文化や日本音楽への強い憧れが、決して自国文化や母国チェコの音楽に対する誇りを欠くことも失うこともないのがチェコである。チェコ人としての歴史、アイデンティティとその誇り。それに相反することなく日本の音楽への敬意と憧れ、賛美があった。

今更だが、音楽文化とはなんだろう。音楽が世界の共通言語だというのは本当だろうか？ 日本の音階や日本人としての感じ方、聴き方を否定して私は、「音楽」を学んだ。しかし教育としての音楽が目指す西洋音楽の本場、ヨーロッパに出た時に、もしくは世界に出た時に、彼らが求めるのは「日本人としての感じ方」であり、「日本人としての表現」なのだ。世界に類のない日本文化の音、日本の伝統音楽の感性を失ってまで得た

西洋的な表現に彼らは感動しない。日本人の感性の上に咲いた音楽だからこそ、世界で聴衆を感動させることができるのだ。ヨーロッパの西と東の中間に位置し、列強の支配や苦難の歴史を乗り越えたチェコ人の感じ方には私は、音楽文化創造の核心を見た気がする。

(筆者紹介) 東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。テノール。ドイツ・イタリア・オーストリア・フランスに学んだ後、チェコ共和国大使館主催・チェコ音楽コンクール入賞を期にチェコ共和国に留学。オモロウツ、バラツキ大学にてヤロスラフ・マイテル教授に師事。留学中、チェコ国内各地でコンサートに出演する傍ら、教会ではミサ、教会音楽でカウンターテナーとしても活躍。また、ヨーロッパで発声指導者、合唱指揮者としても活動。特に発声指導は、本場ヨーロッパでも厚い信頼を寄せられている。学生時代から、指導者、ヴォイスコーチとして定評があり、声楽のみならず器楽奏者からの信頼も厚い。チェコとスロヴァキアの民謡から、クラシック、ポップスまで幅広く東欧の音楽を紹介するコンサートが人気。チェコ共和国大使館主催・チェコ音楽コンクール実行委員。